『金沢大学文化資源学研究』の発刊に寄せて

金沢大学国際文化資源学研究センター長
中村　慎一

金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センターが本年２月１日に正式発足した。本学の３研究域にそれぞれ域内センターを設置する計画がもち上がったのは平成21年２月のことであったと記憶している。それから２年の歳月を経てようやく発足にこぎつけたことになる。

本センターの設置目的は、経済開発やグローバリゼーションの進展で世界各地において消滅の危機に瀕している有形・無形の文化遺産を、新たな価値を創造するための「文化資源」ととらえなおし、その総合的・多角的な研究と保護・活用法の開発を行うことにある。基本的に海外の研究機関と共同で事業を実施することで、本学の国際連携・貢献を強化するという大きな役割も担っている。

我々のグループはすでに本センターの設置以前に、「フィレンツェの壁画修復と復元プロジェクト」（寄付金）、「日中無形文化遺産プロジェクト」（特別経費）、「アジア文化資源学リンケージ金沢セミナー」（日本学術振興会「若手研究者交流支援事業」）、「文化資源学フィールド・マネジャー養成プログラム」（日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」）、「文化資源学国際コンソーシアムの構築」（日本学術振興会「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」といった諸事業を展開してきており、センターの名称に「国際」の文字を冠することに躊躇はなかった。

本センターが「文化資源」に関わる研究と国際貢献を遂行するために設置されたことは前述のとおりであるが、その活動は学生の教育やポスドク等の若手研究者の養成とまったく別個に行われるべきではないし、また、行いうることでもない。研究の成果が人材育成に反映されることで後進が次々と輩出され、それがまた研究活性化の呼び水となる。そうした正のスパイラルができ上がってこそ、本センターも順調に発展していくことができるはずである。

『金沢大学文化資源学研究』は、教員ばかりでなく学生や若手研究者にも開かれた研究成果発表の場である。その創刊号に掲載されたのは、「文化資源学フィールド・マネジャー養成プログラム」で世界各地のフィールドへ調査に赴いた派遣対象者の報告である。まだまだ荒削りで学問的には未熟と言わざるをえない論考もあるかもしれない。しかし、どの１篇をとっても、自らの足で踏みしめ、自らの手で触れ、自らの目で確かめた者だけが持ちうる感動と自信が伝わってくる。本センターの船出にふさわしい１冊になったと言えよう。